

認め、大内義興は義材を奉じて上洛し、管領代として、約一〇年間、天下を牛耳った。そのころ、豊前の武士は、大内氏や守護代杉氏の被官となって山口に祇候し、その領国支配に服し、大内氏の氏寺である氷上山ひかみさん興隆寺の二月会大頭役を城井氏や山田氏がくじ引きによって勤め、仲津郡や築城郡などが脇頭役を命ぜられた。

大内義隆は、その初政において大友義鑑と対立し、豊前・筑前で衝突したが、公方義晴あうせいの斡旋あうせんで和睦してからは友好関係を一四年間ほど維持した。

大内義隆が家老陶隆房や杉重矩らと疎隔を生じ、反逆されて滅びると、陶隆房は大友宗麟の弟晴英はるひさを大内家督として迎え、大内義長と称させた。四年後、陶隆房は毛利元就によって、厳島で滅ぼされ、その一年半後大内義長も、毛利元就と大友宗麟の密約によって、下関で滅び去った。

第三節 北部九州の戦国大名の興亡

大友宗麟と北部九州経略 大友宗麟は、弟の大内義長が生存中は遠慮して豊前に侵入しなかった。その間、秋月文種・宗像氏貞らは、旧主少弐氏を再興させると称して一揆し、大内義長に抗し、田川郡から

仲津郡馬ヶ岳に進出した。大友宗麟は大内義長が自刃すると、直ちに豊前・筑前の両国に兵を進め、上毛郡の山田隆朝を防長へ亡命させ、秋月文種を自害させて豊前・筑前を掌中に収めた。しかし、防長を手中にし

た毛利元就が豊前・筑前の国人たちへの調略を行い、その結果起きた豊前・筑前の国人たちの反乱鎮圧に大友氏を忙殺させて、防長への野心を減殺させた。すなわち、仲津郡の西郷隆頼や企救郡の長野、筑前の麻生・宗像・筑紫氏らを挙兵させ、門司城を占拠して博多への通路を確保しようとした。

ところが大友宗麟は門司城を攻略して城番を置いた。そこで毛利元就は仁保隆慰を渡海させて、これを奪回した。永祿二年（一五五九）のことである。

この翌年が、今川義元が天下統一を目指し上洛を果たそうとして、織田信長から桶狭間で敗れた年なのである。全国各地は大きく動いていたのである。門司城を攻略された大友宗麟は、永祿四年（一五六二）万余の大軍を豊前に送り、門司城奪還を目指した。毛利元就は出雲白鹿の尼子義久攻撃に手いっぱいであったが、子息の隆元と小早川隆景に数万の軍勢を添えて門司城を救援させた。両者はガツブリ組んでにらみ合いをづけた。

大友勢は蓑島辺を毛利水軍に押さえられ、補給路を遮断されたため、長期戦に耐えられなくなって、貫山を越えて日田へ退却した。田原親宏は、馬ヶ岳北麓から国分寺原を通って国東へ帰ろうとして、杉因幡守隆哉に案内された毛利水軍に追尾されて、多大な犠牲者を出して帰郷した。

翌永祿五年（一五六二）、出雲尼子義久と連携して、大友宗麟は再び大軍を豊前に投入した。豊前の西半分は既に毛利氏の占領するところとなっていたから、大友勢は香春岳・松山城（刈田町）を包囲し、門司城下に攻め込んだが、小競り合いを繰り返すのみで長陣となった。対陣する両者の講和を將軍義輝が仲介して、永祿七年六月、毛利方が門司城と企救一郡を残して、豊前・筑前を大友氏に明け渡すという条件で決着した。

毛利氏の北
部九州侵入

しかし、毛利元就は豊前・筑前の国人との連絡をやめず、大友宗麟の豊前・筑前支配は安定しなかった。すなわち、宝満山・岩屋城に拠る高橋鑑種、三岳城に拠る長野筑後守、立花山に拠る立花鑑載、高祖城に拠る原田親種らが次々と離反し、豊後勢の出張のやむことがなかった。

永禄八年（一五六五）、長野筑後守が何者かに暗殺されてから、長野氏は大友氏に従うようになった。永禄九年、出雲月山城の尼子義久が、長年にわたる毛利元就の攻撃に屈して下城すると、毛利氏は豊前・筑前の国人の要望に応じて数万の大軍を渡海させる余裕を取り戻した。

永禄十一年、西郷隆頼と杉隆哉が大坂山に挙兵して、三岳と豊後とを分断し、三岳を孤立させ、同時に松山城・香春岳・古処山・宝満山の連絡路を確保しようとしたが、これは直ちに攻め落とされた。

立花鑑載が戸次道雪らに攻められて滅びたのを契機として、吉川元春・小早川隆景兄弟が数万の大軍を渡海させ、三岳の長野弘勝らを全滅させ、京都郡等覚寺城に拠る長野三河守助守を豊後へ走らせて、豊前の西半分を占領し、軍を筑前に進め、立花城を包囲した。

大友氏と毛
利氏の争い

永禄十二年、大友宗麟は、豊後・肥後・筑後の兵数万を動員して、自ら筑後高良山に動座し、立花山救援に向かわせた。しかし、豊後勢は立花山に近寄ることができず、閏五月四日、芸

州勢に立花山城を明け渡した。豊前・安芸両軍が多々良川の両岸で対峙したまま十月まで日を送っている間、毛利方は、肥前の籠造寺隆信を挙兵させたり、水軍を東豊前へ動かして足元を揺さぶり、肥後では菊池氏を再興させようと策動し、豊州方は、瀬戸内水軍の棟梁村上武吉を寝返らせ、備後の藤井浩玄一類を挙兵させ、伯耆の山中鹿之助・尼子勝久らと連携して、毛利氏の膝元を揺さぶり、大内輝弘に五百余の軍勢と豊後水軍

をつけて周防に上陸させ、山口を占領させた。防長では、大内輝弘の挙兵に応えて、各地で国人や土民の一揆が蜂起した。

十月十五日、毛利元就は立花城撤兵を指示し、山口の大内輝弘を攻めて、富海の茶臼山に自刃させた。芸州勢は、香春岳・松山城を捨て、門司城のみを残して九州から手を引いた。

宝満山城に七年余も籠城して豊州勢を苦しめた高橋鑑種は孤立して和睦し、小倉城に移り、企救一郡を与えられた。

大友宗麟は長野三河守助守を馬ヶ岳城督として、京都・仲津両郡を治めさせ、城井鎮房に築城郡を治めさせた。長野助守は企救郡の旧領を回復しようとして高橋鑑種と対立した。

永祿十三年（一五七〇）から天正六年（一五七八）までの八年間は、大友宗麟の豊前支配がもつとも安定した時期であった。

大友氏と北部九州の国人たち

天正六年十一月、日向高城に進攻した大友氏の豊州勢数万が、島津義久に迎撃されて大敗すると、肥前・筑後・筑前・豊前・肥後の国人は一斉に大友氏から離反し、秋月種実や龍造寺隆信の支配に従うようになった。

天正七年正月杉七郎重良が長門から葭島へ渡り、京都・仲津両郡を長野助守から奪取しようとしたが、高橋鑑種（入道宗仙）・長野助守に反撃されて、椎田で自刃した。この事件は、豊後の田原親宏（入道宗龜）が、娘婿秋月種実との関係を断つ証として、大友宗麟に示した豊前奪回策であった。その一方で、秋月種実・高橋宗仙に圧迫された長野助守は大友氏から離反し、築城郡の城井鎮房や上毛郡の広津鎮頼、下毛郡の野仲

鎮兼を調略し、圧力をかけていた。

天正八年（一五八〇）正月、田原宗亀の養子親貫が、豊前境の鞍懸城に籠城して大友宗麟にそむいた。彼は長野種信の子で秋月種実の甥であるという。秋月種実は、高橋元種・長野助守・城井鎮房らを動かして、田原親貫を支援するため、豊前東部へ侵入した。この時、宇佐宮社官衆も、門司城合戦のころから大友氏の社奉行奈多鑑基・鎮基父子と対立していたので、秋月氏にくみして反大友の旗幟を鮮明にした。田原親貫は、大友宗麟の大軍の攻撃によく耐えて、九か月に及ぶ抵抗を続けたが、ついに城を捨て、豊前へ逃れたものの、宇佐郡で殺害された。

天正九年末、古代宗教勢力である彦山と宇佐宮が、大友氏と敵対する秋月種実方に加担したため、大兵に包囲され、殿舎を焼き打ちされた。

天正十年には、下毛郡の加来・福島・成恒などの国人も、高橋元種に所領の安堵を請い、宇佐郡も、海岸部の国人が秋月氏の支配下に入って、豊前全域が秋月・高橋氏の分国となった。

天正十一年、大友氏は肥後小国衆や玖珠・日田郡衆を下毛郡に送って豊前東部二郡を奪回したが、一時的なものに過ぎなかった。豊後勢が帰国すると、秋月方が再び進出した。

豊臣秀吉の九州征伐 天正十四年（一五八六）三月、大友宗麟は大坂へ上り、秀吉に謁見して、九州への出馬を請うた。五月、宗麟が帰国すると、島津義久が北上を開始し、万余の大兵をもって筑前に侵攻

し、岩屋城を攻めて、七月二十七日、高橋鎮種（入道紹運）以下七〇〇余人を壊滅させ、宝満山をも降した。岩屋城の危急を聞いて、豊臣秀吉は、黒田官兵衛孝高を軍監として、毛利輝元・小早川隆景ら中国勢を急ぎ

渡海させたが、岩屋城救援には間に合わなかった。しかし、立花統虎のこもる立花城は落城をまぬかれ、八月二十五日、島津軍は筑前国から撤退した。

豊前では、八月黒田官兵衛が小倉城を降伏させると、多くの国人が出頭して恭順を誓い、長野三郎左衛門も馬ヶ岳城を黒田孝高に明け渡した。また中国衆は障子岳城を攻略し、加来嘉兵衛ら一〇〇〇人ほどがこもる宇留津城（築城町）も力攻めして壊滅させ、年内には包囲していた香春岳城の高橋元種を降伏させた。こうして、岩石城のみを残して、豊前を豊臣秀吉の支配下に入れた。

天正十五年（一五八七）三月、豊臣秀吉が小倉城に到着すると、翌日には馬ヶ岳城に移り、軍を二手に分けて、自らは田川郡から秋月への道を進み、弟の羽柴秀長・黒田孝高・毛利輝元らは豊後から日向に進ませた。

馬ヶ岳から伊田原に進んだ秀吉は、五〇〇人ばかりがこもる岩石城を力攻めして壊滅するのを見物し、筑前大隈に宿陣したところで、秋月種実父子が出家姿で命乞いに出頭したのを救し、秋月城に移って、諸国人の出頭あいさつを謁見し、ひとまず知行を安堵した。

島津義久が屈服したあと、秀吉は九州の国割りを行い、秋月氏や高橋氏を日向国に移し、長野氏を肥後国に移した。城井鎮房は伊予国に移すことにしたが、城井氏はこれを受けなかったという。

豊前の西部二郡（高橋氏旧領）は毛利勝信に与えられ、残る六郡は黒田孝高に与えられ、豊前の国人で、知行を安堵された時枝・広津・仲間・宮成氏は検地のうえをもって知行地を与えられ、黒田孝高の寄騎に編入された。黒田孝高は馬ヶ岳と妙見岳の中間に一城を築くよう命ぜられ、山国川口に中津城を築き、検地を実

施した。黒田氏の検地は、文祿期の太閤検地と比べると、それほど厳しいものではなかったが、多くの国人に牢人となるか百姓身分に落とされるかの選択を迫るものであったから、国内に多大な動揺を生み、肥後国と同様の国一揆が発生した。翌天正十六年（一五八八）、黒田・毛利氏は、吉川氏ら中国勢の応援を得て、城井鎮房・野仲鎮兼を中心とする一揆を辛うじて鎮圧し、城井一族を滅亡させた。そして、黒田孝高は朝鮮出兵にとりかかった。